

---

# ウィルオウispの休息

ttt

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウィルオウイスプの休息

### 【Nコード】

N4379BA

### 【作者名】

t t t

### 【あらすじ】

「墮天の日」その日を境に灰飲まれてしまった世界  
その世界で、主人公「遠野 久史」は未開地調査部先遣隊、別名「ウィルオウイスプ」と呼ばれる精鋭だけがなれる役職に就いていた。

そして久史は、一番死亡率の高いとされている森の未開地調査をすることになり、未開の街を見つける。

そこで、「沖田 ミナウ」「沖田 小雪」の二人に出会うのであった。

## 永久の街 邂逅

人間は過ちを犯した

その過ちは、世界を灰に飲ませた

世界はすでに綺麗な空気のある場所は、居住区のクリーンエリアし  
かなくなつた

保護スーツと保護マスクなしで外に出れば、体中灰だらけになつて  
しまう

太陽は灰に全て遮られいつでも夜のような状況

電力は絶たれている為、街灯もなく夜は何も見えなくなる

太陽の光が射さないため、気温は一気にさがつた

人々が墮天の日と呼ぶ、その日から世界はこの様になつてしまつた。

墮天の日

それは、環境汚染を改善するために組織された一つの研究機関の失  
敗によつて迎えられるた。

失敗は今をさかのぼる事の5年前に起きた。

実際の研究は公には出ておらず、一般人は何も知ることなく灰を吸  
い倒れていった。

墮天の日を生き残つたのは世界人口の1割未満と言われている。

かろうじて生き延びた人々は、一切の灰や埃を入れない『クリーン  
エリア』を設立し、そこで過ごすことを余儀なくされた。

クリーンエリアには、荒廃した世界を調査する部隊が存在する。

その中でも一際能力の高い部隊『未開地調査部先遣隊』

彼らは、未開の地を少人数で探索し安全を確認する部隊だ。

ライトを持って、荒廃した世界を歩きまわる様から彼らには異名が  
あつた。その名を

『ウイル・オ・ウイスプ』

「はあゝ・・・寒くなつてきたな」

灰を防ぐために着ている、保護スーツはとても防寒性にも優れている服なはずだが、森を進むたびに保護スーツを通り越して寒さが肌に刺してくる。

保護マスク越しの声は自分の耳にも籠って聞こえる。

俺は今、未開地の探索でも危険性の最も高いと言われている森の奥の調査に来ている。

なぜ森の未開地は危険なのか。それは森の未開地には木に溜まった灰が至る所で落ち、それが舞いつい1メートル先の視界さえも見えないからだ。1メートルと言えば自分の身長が170cm程度だから残りの70cm先が見えない、つまり足の部分は見えない事になる。ライトも持っているが、気休め程度にしかない。

ボソボソ・・・ドスン

「うっ・・・頭に直撃かよ。」

木から落ちてきた灰の塊が、頭に直撃して粉碎され視界を完璧に奪う。しかし、足を止めることはしない。森の調査で一番の敵は時間だから。一步一步見えない足場を踏みしめて進んでいく。

ふと、軽風を感じる。

「ん？・・・灰が薄くなってきた？」

灰の塊を直撃させて視界が悪かったから見えていなかったが、ついさつき森を抜けたようだ。

その先には、未開の街があった。

「・・・・・・・・・・」

5年も放置された街なだけに、状態はあまり芳しくはない。もともと、期待もしていなかった。家は、灰で老朽化したのかほとんどが潰れていた。家が潰れて街が見渡しやすくなってきていたおかげで、自分が街のどの辺にいるかわかりやすい。どうやら、俺は街の奥の方に出たらしい。周りを見ても家と後ろに森が広がっているだけだ。

俺の居たクリーンエリア、『飛鳥クリーンエリア』を出てすでに丸二日。森の調査ということで食料と水は大量に持ってきたが、こ

この街を一日調査すれば帰りの食料に困ることはまずなさそうな街の大きさだ。

「さて・・・調査開始としますか」

ここの地域はどうやら、灰の被害が少ないらしい。歩いていて、周りが良く見渡せる。墮天の日以来、こんなに見渡しの良い場所は初めて見た気がする。

そんなことを考えて、歩いているとサクツサクツ

「ん？」

灰を踏んだつもりでいたが、灰にしては妙な音がする。それと同時に、足に妙な寒さを感じた。

保護スーツの左腕に備え付けてある時計を見るとちょうど正午12時。視界も開けていることからライトを鞆のポケットに仕舞い、灰の被害も少ないので保護スーツとチャックで一体化している手袋を外して、地面の謎の物体を素手で調べた。

「ヤバツ、手袋取ると寒いなサクツ

地面の物体を持った瞬間、手に凍るような寒さが走る。

「冷た！」

思わず、手袋をしている左手に持ちかえる。それは灰の様にすぐに手からこぼれてしまう事もなく、そのままのサイズで左手に移った。

「これ・・・雪だ」

左手に持った雪を少し強く握りしめて崩すと、手袋には湿った灰がついた。

おそらく、この街の灰の被害の少ない理由は雪に灰が溶け込んだからなのだろう。

「この街だったら新しいクリーンエリアを作るのに適してるかもしれないな」

後は、この寒さを防ぐための防寒対策をちゃんとすれば、そんな

事を考えて歩いてみると一つの木の下に大きな石が置いてあるのに目が惹かれた。

周りは雪だらけなのに、石が置いてある場所だけ雪をどけた跡がある。

気になって、近くに行ってみると石には、名前が彫ってあった。どうやら墓のようだ。石碑のようにちゃんとした石ではなく、ただの大きめの石に名前が彫られているだけだが。そこには

沖田 天信

沖田 智茶

と、ぎこちない文字で彫られていた。

「おきたてんしん・・・おきた・・・ちさ？、でいいのか？」

なんと読むのか確かめるすべはないが、おそらくこれであっているだろう。

ボソボソ・・・ガガガガガ

石が置いてあるのは木の下。木に積もった大量の雪が落ちてきて俺の体にのしかかってきた。

俺は墓と一緒に雪の中に埋もれた。

かなり危険な状態なのかもしれない・・・だが、意外と俺は冷静だった。

今まで、たくさん未開地の先遣調査をしてきて、人が死んでいくのはたくさん見てきたからだろうか。

木の枝に保護マスクを引っかからせ、スッポリとマスクが取れてパニックを起こして先遣調査してきた道を帰ろうとして、結局灰で息を詰まらせて死んだ奴もいた。

雪が落ちてきた場合はもがけばいいのだろうか？  
ぐっぐぐぐっぐ・・・

結構積もつたらしい。身動きが取れない。おそらく普通の服だったら身動きが取れたのだろうが保護スーツの重さもあって動けないんだろう。

さっき手袋を外した右手に雪が直にあたり右手だけ、痛みが尋常

じゃない。と、言ってもそろそろ神経も麻痺して痛みが無くなって来てもいるんだが。

だんだん、寒さで意識も遠くなってきた。自分でも、まさか未開の街で大きな石に惹かれて雪に埋もれて死ぬなんて世の中何があるかわからないなと思った。だんだんと意識が薄れていく。

「痛っ！」

薄れゆく意識の中、左足に激痛が走って一瞬意識が戻るがすぐに意識を失った。

## 永久の街 邂逅（後書き）

序章なんで、主人公以外だせる余裕がなくて申し訳ないです

もっと女の子とか出したいでござる

といっても、この物語主要人物3人しかいなんですけどねw



## 目を開けばクリーンエリア

あつたかい。

俺は死んだのだろうか。丸二日歩いて疲れ切った体は既になかった。

未開の街で、雪に埋もれたのなら死んだと考えるのが妥当だろう。するとここは天国か？

そんなことを考えさせるほど、居心地が良かった。ふかふかの枕に、分厚い掛け布団。

もう少し、寝ていてもいいんだろうか。

「はあ」

状況がつかめず思わずため息をついた。

「あ！小雪ちゃん！この人そろそろ起きるんじゃないかな？」

話声が聞こえる。声の主はやわらかな女の声で、誰かに話しかけていた。

「ええ・・・生き返ったの間違いじゃないの？」

もう一つの声は、俺の目覚めをあまり好ましくない様な声でこちらも女の声だ。

寝ぼけた体から少しずつ意識が戻って来る。

左足には、意識が薄れる時に感じた痛み。

俺は生きているのか？

ゆっくりと目を開けると、上向きに寝かされて天井が見えると思っていたが、見上げた先には、見知らぬ女の子の顔があった。

「小雪ちゃん！起きたよ、この人！おはようございます」

満面の笑みを受けて俺は、起床を迎えた。妙なヘアピンを付けた白髪で短髪の子を、不意に俺はかわいいと思った。

「ああ・・・おはよう。俺はなんでこんな処に？・・・」

目を開けたが、まだ少し体がけだるく寝転がりながら質問をした。

すると、奥の方から

「あんたが、雪の中に埋もれていたのを偶然お姉ちゃんが見つけて助けてくれたのよ。感謝しなさい・・・あと、お姉ちゃんの膝枕そんなに気持ちいいの？離れようとししないで」

「膝枕？」

俺は、見知らぬ女の子その2に言われて初めて自分が膝枕されていることに気がついた。

「えへへ、そんなに寝心地良かったんですか？」

目の前の女の子はまた満面の笑みで問いかけてきた。

「うおっ！ご、ごめん！」

慌てて体を起した。

ゴチンッ！

顔を覗くようにしていた女の子の頭に額がぶつかる。さっきまで全く体を動かそうとしなかったからか全然気付かなかったが、女の子が手を握っていたらしい。頭をぶつけて、手は離されたが

「うあつ痛うう」

「あいた」

今度はゆっくりと、体を起しづつからないように起きた。

「ごめん・・・大丈夫か？」

「はい・・・」

「まったく、何してるのよ二人とも」

体を起して周りを見回すと、ここが家の中であることに初めて気がついた。この場にいるのは二人の女の子だけ。

そして、見知らぬ女の子その2は部屋の片隅のベッドにいる。なんだか、ベッドにいるのがとてもフィットした感じで、ピンク色のパジャマを着て、いつもそこにずっといる感じがにじみ出していた。

他の人たちは、違うクリーンエリアにいるのだろうか。

「それで、ここは一体？えっと・・・」

「ああ、南瓜は沖田<sup>おきた</sup> 南瓜<sup>みなう</sup>です。まあ、気軽に南瓜って呼んでくださいね。そしてここは、私とそこに寝てる妹の小雪ちゃんの家です。

それと、手は大丈夫ですか？凍傷になる寸前でしたのでずっと手を握っていたんですが。」

と、おでこを抑えながら自己紹介をしてくれた

(・・・沖田？どつかで聞いたような・・・)

意識を失う寸前はもう、麻痺して痛みを感じなかった右手だったが、今は感覚もちゃんと戻り痛みもなかった。それよりも、謎なのが左足の痛みだった。

あと、南瓜は一人称が南瓜らしい。

「あ、ありがとう。おかげでもう何ともないよ。俺は、遠野久史だ。まあ、久史とでも呼んでくれ。あと、覚えがないのが足の痛みなんだが」

「あ、あー・・・それはですね」

南瓜が苦笑いをしていると

「お姉ちゃんが、お父さんとお母さんの墓が雪に埋もれていたから雪を退けていたら、あんたの左足に直撃したそうよ。多分だけど、それ・・・骨折れてるわよ」

なるほど。雪かきをしている所に偶然俺が埋まっていたのか。

あの墓の子供たちということは、ここは墓の場所からそれほど離れていないんだろう。

少なくとも、未開の街の中であることは間違いなさそうだ。

意識が飛ぶ寸前にあった左足の激痛はどうやら南瓜が作ったらしい。だがこの怪我がなかったら俺は助からなかったわけだ。これも怪我の功名というのだろうか。

「ごめんなさい・・・」

「いや、別にこれがなかったら俺は雪の中で死んでいた訳だし命の代償としては軽い方だよ。そういえばまだお礼言っただけだね。

助けてくれてありがとう南瓜」

「えへへ、お礼言われちゃいました」

「けど、全治一カ月つても困ったもんだな・・・」

「なに？雪の中で死んでた方がマシだったの？」

「別に、そういう意味じゃないよ。いやなに、ここから丸二日森を歩き抜くと俺の元いたクリーンエリアに着くんだが……」

俺のいたクリーンエリアの話をしようとすると、二人とも疑問を抱く様な顔を見せた。

「クリーンエリア……ってなんですか？」

南瓜が質問してきた。

クリーンエリアを知らない？

俺は頭が混乱した。自分が居る場所がどこであるのか。なぜ、この子たちはこの灰の無い部屋にいるのか。この街には、この二人の子しかいないのか。どうやって、生き延びてきたのか。

次々と、頭の中に疑問が浮かび上がって思考がまとまらない。

「ちよ、ちよっと待ってくれ。んじゃあ、ここはどこなんだ？」

俺は、自分が死ぬ直前より焦っていた。さらに焦りは、口から洩れ二人に伝わってしまったほどに焦っていた。

確かに、こんなに頑丈なクリーンエリアを俺は見たことが無い。もともと、疑問に持つべきだったんだ、俺が未開の街で生き延びていることに。

「はい？ここは、南瓜と小雪ちゃんの家ですよ。さっき言ったじゃないですか」

そういうことじゃない。

俺は、あたりを見回した。ここは部屋というには少し大きい。左を見ると大きな扉、右には普通の扉。後ろを見るとこの部屋を分断するかのように大きなガラスがあり、ガラスの向こう側は、灰だらけ。前を見ると小さな小窓、小窓からは外の様子が見えていて、外は灰の世界と銀世界が混じった景色。小窓の下にずらっと並んだ本棚。その本の数は百は超えるだろう。

右の方に小雪ちゃんがベットにちょこんと座っている。

「ごめんなさいね。お姉ちゃんはちよっとおつむが悪いのよ。私達は、五年間ここに二人で過ごしてきたから回りの様子を知らないの」  
5年もたった二人で過ごしてきたというのか？

「5年も?・・・じ、じゃあ、ここはどうやって灰のない状態を作ったって言うんだ?」

俺の五年前はガスマスクをしながら生き残った人たちで試行錯誤して一週間かけてクリーンエリアを作った。たくさんの被害も受けた。そんなことをこの二人で行えるはずがなかった。

そんな、昔のことを思い出していると小雪ちゃんが

「私はね、白血病なの」

白血病?

「白血病はね、菌に抗うための力が低下していて『無菌室』に入っていないければ生きていけないのよ・・・ここまで話せば理解できたんじゃないかしら?」

「無菌室・・・つまり、5年前の日に小雪ちゃんはもともと、この灰の入らない環境にずっといたってことか」

「そうよ」

確かに、納得が行った。

「でも、なんで南瓜しかここにいないんだ?もつとこの部屋にたくさんの人を入れてやれば助かった人は多くなったんじゃないのか?」  
「私の部屋に入るには一人3分間無菌処理を施さないと入れないようになってるの」

「それで、お父さんとお母さんは南瓜を最初に入れてくれたの。その三分間で小雪ちゃん部屋のことを知ってる人たちが集まって、お父さんとお母さんはこの部屋に割り込んでこようとする人たちを押さえてる間に灰を吸って」

「わ、わかった・・・ごめん・・・変なこと思い返させちゃって」

二人とも、苦しい思いをして墮天の日を迎えたことが伝わってきて、逆にこつちが後ろめたい気持ちになった。

墮天の日は、やはり誰もが苦い思いをした事なのは変わりはないらしい。

「別に、あの日を楽しく過ごした人なんていないんだろうしいいわ

よ。それより、私は今街の外がどんな風になってるか聞きたいわ」「あ！私も聞きたいです、それ！私達5年もこの家にいるからとても退屈なのよ。街の外はもつと退屈しないんでしょうか？」

真剣な顔で街の外の話を聞く小雪ちゃんと、目を輝かせて楽しそうに街の外の話を聞く南瓜

質問内容は変わらないが、おそらく二人の聞こうとしていることがまったく違うのがわかる

「な、なんか南瓜の質問は後回しにしていい感じかな？」

苦笑いをして、小雪ちゃんに問いかける

「ええ」

「そんなあ。あ、じゃあ南瓜はお茶入れてきますね」

あっけなくあきらめた。むしろ、この家にお茶があること事態に俺は少し驚いた。

南瓜は、立ち上がり楽しそうに右側の扉の奥に行った。

「お、お茶なんてあるんだな」

「この街の物を、お姉ちゃんが回収してきたからね」

なるほど、すでに生存者は沖田姉妹の二人のみ。そこいらから何を盗ろうと誰も文句は言わないわけだ。というか、あの右側の扉の置くに何があるのかすごく気になる。

「なるほど。まあ、ざっと小雪ちゃんが知りたいことを話すとだな。まず、クリーンエリアだ。クリーンエリアってのは、ここみたいに灰が入らない環境を総称した名前なんだ」

「なるほどね」

「お茶入ったわよ」

俺がクリーンエリアの意味を教えた20〜30秒の間にお茶が出てきた。一体お湯はどうやって沸かしたのかさえわからないというのに、20〜30秒でお茶を入れられると突っ込みの2つや3つ入れたくもなる。

「早過ぎないか？」

「お姉ちゃんは、お茶入れのプロなのよ」

きりつと、言い切る小雪ちゃん。

「マジかよ」

「嘘よ」

「だろうなあ」

「あらあら、二人とも南瓜が居ない間に仲良くなっちゃって、はい小雪ちゃんのお茶」

そんなことを言いながら、小雪ちゃんにお茶を渡してお盆を俺の前に置いて、また俺の目の前に正座で座る南瓜。

「はい、どうぞ久史さん」

「ありがとう。まあ、一分も話す隙が無かったけどな」

「むしろ、あんたと仲良くなる話をした覚えはないわ」

「あら、そんなに早かったかしら？ふふ」

なんだか、だいぶ話がそれてしまった。何とか戻さなければ

「ま、まあとりあえず南瓜も戻ったことだし話の続きをしよう。それで、俺の居たクリーンエリアってのが飛鳥クリーンエリアって場所なんだが。そこには、100人ほどの生存者が集まってるんだ。違うクリーンエリアからの情報だとかかなり生存者が多い方らしいけど」

「他にも、そのクリーンエリアってのはあるの？」

「結構あるそう。ちなみに、日本は灰の被害が結構少ない方らしい」

「なんだか、自分で話していて暗い話だ、と思ってしまう。墮天の日がなければまだ学生を謳歌していたはずの自分達で世間話をするなんて。」

「それでだ。俺がここに来た理由なんだが、俺はクリーンエリアで未開地調査部先遣隊をやってるんだ」

「な、なんか。長い名前ですね」

南瓜が苦い顔をして名前に不満を吐く。

「お姉ちゃんはちょっとおつむが悪いのよ。気にしないで」

「ははは、まあ覚えやすいようにあだ名が付いてるんだな、これが。」

ライトを持って少人数で歩く姿から誰かが『ウィルオウイスプ』なんて名前をつけたらしい」

すると、南瓜がいきなり立ち上がった。立ち上がった反動でスカートがめくれてシマシマパンツ・・・通称シマパンと呼ばれる、それが丸見えだがまったく気にする様子は無い。

「南瓜知ってますよ！あの、ハロウインの日に作るあのかぼちゃさんのランタンを持った人のことでしょ！」

人差し指で俺を指して、決めながら言う南瓜。

「パンツは丸見えだが正解だな・・・」

「大丈夫よ、これでもお姉ちゃんはおつむが悪いのよ。」

「二人ともひどいですう」

まあ「良くてきました」ぐらいの言葉をかけてあげても良かったかもしれない。

「あんだ、お姉ちゃんの名前の漢字をなんて書くか知ってる？」

「ん？唐突だな？みなう・・・だよな・・・みなう・・・みなう・・・」

何度か口に出して俺はいろいろと考えた。もともと、珍しい名前だからあまり思い浮かばないが。

「そんなに、呼ばれると恥ずかしくなっちゃいます」

すると、小雪ちゃんがベットの横にある収納家具のチェストからメモ帳とペンを取り出して、文字を書き出した。

「こつ、書くのよ」

そう言って、動物の絵が端に書かかれているかわいらしいメモ帳を俺に見せ付けた。そこに書かれていた文字は

南瓜

「スイカ！」

「違う！それは西の瓜！」

「ゴーヤ！」

「それは苦い瓜！」

「キュウリ！」



「それは、えつと・・・あなた、さつきからわざとやってるでしょ！ふーふー！」

興奮して、息を荒げる小雪ちゃん。

「さっきの仕返しだ」

実際はちゃんと分かっている。かぼちゃだ。

そして、南瓜が付けている妙な髪留めも、かぼちゃ。しかも、そのかぼちゃはハロウィンで使われるかぼちゃ、ジャックランタンの絵柄だった。

どうしてか、南瓜はかぼちゃにとても執着があるようだ。

「あ！だめ！小雪ちゃんは興奮すると・・・」

突然、南瓜が小雪ちゃんが興奮するのを止めようとする。

「え？まさか病気に悪かったか？」

俺は少し焦って、言葉を止めた。

「いいえ、病気にはなんら支障はないんですけど・・・」

「うああ〜ん、久史がいじめる〜」

・・・なんとというか、さつきから大人な雰囲気話していたのが、一気に子供じみた言葉使いに変わった。

すると、ベッドから立ち上がった。

「そんな悪い久史にはこうしてくれる！」

ベッドから立ち上がった小雪ちゃんは俺に向かって腕を前に出し、鳩尾直撃ルートで思いっきりダイブしてきた。

ズゴーン！

「ぎ、ぎゃあああああああ！あ、あ、あ、足、足、足、足！」

「このこのこのこのこのこの」

鳩尾は、なんとかガードした。

ポコポコと、腕を上下に動かす攻撃はかわいらしい・・・が、骨折した足にのしかかられて激痛が走る。

俺は必死に小雪ちゃんを上から退けようとするが、まったく退こうとする気配がない。

「あら〜、こうなったら小雪ちゃんをなだめるの難しいのよ〜。結

構時間かかるわよ〜」

横から見守ってる南瓜は笑っていた。というか、南瓜はいつでも笑っている。

「そ、そ、そんな笑ってないで助けて・・・」

「お姉ちゃんをこらませるんじゃない!」

小雪ちゃんはすでに、言葉もおぼつかない子供まで戻っていた。

「いやああああ、わかった!俺が悪かった!だからお願いだから足から退いてください小雪ちゃああああん!」

そんなことを言ってもまったくおさまる様子の無い小雪ちゃん。

この後も、なんども足から退くようにお願いをするが退くことはなく、なだめてもまったく治まる事はなかった。

やっと足から小雪ちゃんを下すことができたのが、この約30分後。いつもの小雪ちゃんに戻ったのが2時間後。その時すでに時刻は午後7時になっていた。俺たちは、そのあとすぐに夕食をとって寝ることにした。ちなみに、この日に出してもらった夕食は非常食の乾パン。

結局、二人に教えることができたのはクリーンエリアがどういう場所であるかだけだった。

今日を境に、足が治るまでの期間、俺の居候生活が始まった。

と、言ってもこの調子だと治るのはだいぶ先になりそうだ・・・。

## 目を開けばクリーンエリア（後書き）

なんか短くまとめられなくてすみませんorz

次の章は短めにまとめましたのでご勘弁を

しかし、自宅を無菌室にするとは沖田パパがんばりますねえ

というか、もうちょい南瓜の名前を感じて出すのは後にした方がよかったですかねw

## 整理整頓なう

飛鳥クリーンエリア出発前 ・久史の個室

クリーンエリアは、全体をビニールで覆いドーム状の形になっていて、灰の入らない環境になっている。外の空気は空気清浄換気口を通り綺麗な空気になって入ってくる。外に出す空気は普通の換気口から出されていく。温度は四隅に置いてある空調が調節してくれる。

ビニールの中は簡易的なビニールもしくは板での仕切りを作っており、プライベートのスペースを作っている。

俺の部屋は、側面をベニヤ板で囲い天井をビニールで覆いそこにライトをつるしてある簡易的な部屋だ。

今は朝の7時。俺は保護スーツと保護マスクの調整とリュックに調査期間である四日分の食料と水を詰めていた。

保護スーツと保護マスクには異常はなく万全な状態であることを確認済みだから布団の上に放っておいた。

長い調査だから大量の荷物で詰めるのも一苦労だ。

ちなみに、食料と言っても四日もの長い調査だからすべて保存食だ。しかしこれが、いろんな非常食があって、カンパン、ビスケット、米を乾燥させたというアルファ化米、他ドライフードなど栄養バランスに気を配れるほど種類がたくさんある。

それを、大きなリュックに整理しながら入れるのはとても手間だ。そんなせいか部屋は荒れまくっている。

「はあ、どうしても入りきれないな」

ため息をついて、荷物を見ながらこれをどう整理するか考えていると、簡易的に作られ扉が開いた。

ボタンッ

「またこんなに散らかして！」

幼馴染の雨乃だ。雨乃は俺の部屋に入ってくるなり大事な調査用

の食料を蹴って入ってきた。蹴られた食料は俺の前に転がった。

「おま！俺の調査用の食料蹴るなよ！」

俺は、蹴られた食料を拾って、そのままリュックに詰めた。

「そんな、詰め方したら入らないにきまつてるじゃないの！貸しなさい！」

そう言つて、雨乃は俺からリュックをひつたくるなり、いきなり中身を出し始めた。

「ああああ．．．なんてことをしてくれるんだ雨乃．．．せつかく入れたのに．．．」

「なに？」

怒つた様子で睨まれた。俺はベッドに正座をして座つてただその様子を見ている。

「大体ねえ、こうたくさん荷物がある時はきちんと整理整頓をして入れなきゃ入るはずがないでしょ？久史はいつも、雑に入れるから入りきらないのよ！」

なんとこのセリフを聞いたことが。

あえて言うが、俺は荷物をリュックに詰める事は！．．．．．苦手だ。

毎回、先遣調査の仕事に行く時は雨乃に詰めて貰っている。

「はい．．．まったく、弁明の余地もありません。」

「．．．．．本当に、あの森に行くの？」

勢いよく荷物詰めをしてると思つたら、いきなりピタツと手が止まった。

さつきから強気だった雨乃が手のひらを返すかのように弱気な声で問いかけてきた。

「しょうがないだろ。そう長く森の調査を放っておくこともできないし、誰も行かないんだ。だから、俺が行くんだよ」

雨乃を慰めるようにやさしく言葉を返す。

「なんで、久史なのよ．．．」

「大丈夫だって！俺は絶対帰ってくる！そうだ、約束に雨乃にこれ

を渡しておくよ」

俺は立ち上がったって、保護スーツの懐から古臭い手帳を取り出した。そして、それを雨乃に渡す。

雨乃は、ゆっくり俺の手から手帳を取る。

「これ・・・あなたのお父さんの手帳じゃない」

「ああ、俺の大事な父さんの形見だ。それを無くして死ぬなんてありえないからな。絶対に無くすんじゃないぞ」

「・・・しょうがないんだから。んじゃ、さっさと支度するわよ！手伝いなさい！」

そういつて、また雨乃は荷物を詰め始めた。

整理整頓なう（後書き）

アルファ米は過酷なたびには適さないですよね・・・  
エベレストとかでアルファ米持って行っても手間かかってめんどく  
さそうですしい

## 苦悶の一日目

沖田家宅 時刻午前5時

俺は、ふと目が覚めた。

横には、ベットに小雪ちゃん、俺の入ってる布団に南瓜。

昨日、布団が一つしか無いということ、南瓜と二人で布団を使うことになって南瓜と寝ることになったのだ。最初は緊張して、まったく落ち着かなかつたが、疲れもあった為かすぐに寝てしまった。ずっと着た状態になっている保護スーツの裏ポケットを意識する。そこには、いつもあるはずの手帳の重みは無かった。今更ながら、飛鳥クリーンエリアの人たちが騒いでるんでは無いかと心配になる。

特に、雨乃には絶対に帰ると宣言したから四日で帰らなかつたらきつと、落ち込むだろう。

今日で調査開始から三日目。

「治るのに、一カ月はかかるよなあ」

俺は足の怪我を見ながら一人呟く。

「はああ、かぼちゃさんたちが踊ってるううんにゆう」

「……………寝言？」

突拍子の無い寝言に少し驚く。

南瓜が布団から外れないように布団からそつと出て、俺は体を起こした。

目の前には小窓があるが、小窓から外は何も見えない。外は灰の被害で、夜明けごろだというのに真夜中に思わせるほどに暗い。そんなことは、もうここ5年の間になれたものだ。

そして、俺は足は骨折しているため歩くことができないから腕で体をずりながら、左の大きな扉の下に置かれている自分のリュックの元まで行った。雪に一回埋もれた所為でリュックは湿っぽくなっ

てしまっていた。



ガサガサ

「中身は・・・大丈夫か・・・」

中まで水は入っておらず調査用の道具や食料は全部無事だった。俺は、中身が無事なのを確認して再び体をずりながら布団に戻る。南瓜と一緒に布団を使うのに妙な気恥ずかしさを感じ少し距離をとって二度寝に入ることにした。

「ふにゆうくん」

妙な寝息を立てながら南瓜が俺に抱きついてきた。

「・・・つつ!!」

只今の状況を図的に表すと、まず布団の中に俺が右、南瓜が左。

この状況で抱きつかれると左足にも接触することになる。

つまりは、今左足に南瓜の足が絡みつき骨折部にあたっているのだ。寝返りを打って逃げようとするが、足を絡められているのと骨折もあいまってうまく寝返りが打てない。

南瓜の少し大きめな胸が押し当てられ、男としては嬉しいである。この状況は、足の痛みが全てかささらっていった。

南瓜や小雪ちゃんを起こさないためにも声を上げるわけにもいかず、ただ声もなく俺は死闘を繰り広げてた。

やはり、俺の足が治るのはまだまだ先の話になりそうだった。

朝だ、ご飯だ、不可解だ

沖田家 時刻午前7時半

チュンチュン・・・チュンチュン

清々しい、朝のスズメの鳴き声が・・・

「・・・スズメがいるわけ無いだろ」

俺は、目を瞑りながら人間の声から発せられた、わざとらしいスズメの鳴き声に突っ込みを入れた。ちなみに、スズメや他の動物達は墮天の日以来殆どが死に絶えたのだ。だから、朝昼晩、時間に問わずスズメの鳴き声が聞こえてくることなんてもう一生ないのだ。「えっへへ、おはようございます。死んだように寝てましたけど、だいぶ疲れてたんですね」

俺は、今日も満面の笑みを前に起床を迎えた。

「いや・・・それは南瓜のせい・・・」

俺は小声でボソっと言う。

「え？」

声が聞きとれない、と言った様子で首をかしげる南瓜。

「いや、ほんと死ななくてよかったなーってね」

「そうね、お姉ちゃんに感謝することよ」

「あ、ああ。そりゃ感謝してるさ」

「いえいえ、感謝にはおよばねえですよ。はい、今日の朝ごはんです。」

今日の朝ごはんは・・・

「・・・なんで非常食じゃないんだ!!!」

俺はびっくりして、つい大きめな声で突っ込みを入れてしまった。

「うるさいわね。近所迷惑だから喚かないで」

「いやっご近所さん全部倒壊してますけどね!」

まず、ご飯は米をアルファ化させた非常食があるからさして突っ込みどころではないが、今回出してもらった物は朝食の定番

「ご飯とみそ汁

「なんで、みそ汁があるんだ？」

そういうと、小窓の下にある本棚に南瓜が歩いて行き何百とある一つの本を取り出した。そして俺に、ドヤ顔でその本のタイトルを見せつける。

「ジャジャン！」

「『馬鹿でも分かる一からのみそ汁作成法』……なんか、タイトルに突っ込みを入れない気分なんだけど……」

「タイトルに惑わされちゃいけませんよ久史さん。この本は本当に分かりやすくみそ汁の作り方が書いてあるんですから」

南瓜が本を取り出した場所の右隣りの本を見ると『分かる人には分かるみそ汁のおいしい作り方』という本があった。

「その隣の本を取らないところらへんが南瓜らしいな」

「えへへ、それほどでも」

「けなされてるのよ」

「いやいや、基本も大事だからな。それじゃ、朝食を食おうか」

俺はお膳の上に置いてある『おてもと』と書かれた箸袋には、「割り箸がなんであるのか！」と、もう驚くことなく割り箸を取り出して箸を割った。

「ああ、まだ私のご飯を持ってきてないから待ってくださいよ」

そういつて、南瓜は右奥の扉に入って行った

待っている間、やはり、この不思議な家にはとつても突っ込みどころが満載らしく、俺のお膳の上には煎茶が置かれていた。

（この家は、ガスもなくどうやってお湯を沸かしているのだろう。むしろ、水はどこから供給されてくるのか……）

そんなことを考えたが、もう突っ込み疲れて突っ込むことはやめた。

「……」

お茶を凝視している間に、小雪ちゃんも南瓜も食事の準備が整っていた。

「それじゃあ、いただきますしよおう!」

南瓜が箸を持って元気に食事の号令をかける。その手にはプラスチック製の箸が持たれている。

(ああ、やっぱりマイ箸はあるんだ……)

「いただきます」

俺は小雪ちゃんと一緒に手を合わせ、いただきますを言って、まず一番気になるみそ汁から食べることにした。

ズゾゾ

「ま・ま・ま」

「ま、で止めないでよ!その後、続く言葉なんて一つしか無いじゃない!」

「まずい……と、言うだけでも?」

「いや、だって俺ワカメ嫌いなんだよ」

「知らないわよあなたの好き嫌いなんて!」

こつぴどく、小雪ちゃんに突っ込みを入れられた。すると、南瓜がもともと正座していた足を崩して足を崩した反対側の床に両手を置いて

「知りませんでした……まさか、久史さんがワカメ嫌いだったなんて!」

「え……いや、そこまで落ち込むの?!」

「あゝ、お姉ちゃんを泣かした」

「いやっ別に食べれないわけじゃないからさ、ほら全然……ばくっ」

「ぐおえ」

「吐くほど嫌いなら無理して食うな!」

「いいのよ。ワカメは全部私が貰い受けるわ」

そう言っつて、俺のみそ汁のお椀を南瓜が取ってワカメを採取しました。

「い、いや、もっと女の子なら間接キスとか気にしないのか」

「か、間接キスってなんですか!?!……小雪ちゃん!」

「し、知らないわ！なんなのよその卑猥な言葉は！キスとどうちがうの！？」

どうやらまったく間接キスと言うものを、知らないらしい。キスと間接キスの区別がつかないといった感じだ。

「え？いや、例えば俺が使った箸を南瓜が使ったら間接的にキスをしたって事で間接キスに」

「なるほど・・・」

（二人とも反応がかるい！）

ちよつと心がめげそうになった。

「まあ、とりあえずもう味噌汁は置いておいて。南瓜にお願いがあるんだ」

南瓜は、俺のお椀からワカメを抜き取るのを止め、俺のお盆の上に置いて自分のご飯を食べだした。

「ふあい、ふあんえふおうは？」

「はい、なんででしょうか・・・だそうよ」

南瓜のよくわからない言葉を小雪ちゃんが翻訳してくれた。

（よく、あんな言葉がわかるな・・・）

「俺この食事が終わったら、この街を探索してみたいんだ」

「なにその、死亡フラグみたいな言い方・・・」

もぐもぐ・・・ゴックン・・・

南瓜の、ご飯を飲み込むまで少しの時間があく。

「はい、いいですよ」

「え？私結構的確な突っ込み入れなかつた今？」

小雪ちゃんが少しおどけた感じで俺たちに質問をする。

「ほんとか！南瓜がいればだいぶ、楽に街を見て回れそうだよ」

「この街のことは私にまかせなさい」

トン、と胸をたたき自信ありげな感じだ。小窓の外を見ると良い調査日和と言った感じにいつもよりみわたしが良かった。

「え？私置いてけぼりにされてる感じ？」

「しょうがないのよ・・・小雪ちゃんは病気だから置いていくしか

ないの・・・」

小雪ちゃんをなだめるように、南瓜が言う。俺は南瓜が小雪ちゃんの話を理解していないことを分かっていながら放置をして小窓の灰で見えるはずの無い遠くを見続ける。今日も、変わらず悪い天気だ。

「違うわよ!!ふーふー!」

昨日と同じように小雪ちゃんが興奮しだした。はっ、と俺は昨日のことを思い出しあせる。

「あゝ、悪かった悪かった。南瓜もそれぐらいにしてそろそろご飯に・・・」

ドーン!

(まさかの、ゼロ拍子タックル!)

・・・

朝だ、ご飯だ、不可解だ（後書き）

ちなみに、僕はワカメが大嫌いです

・・・あれって、好きな人居るんですかね？w

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4379ba/>

---

ウィルオウイスプの休息

2012年1月14日12時46分発行